

常陽藝文

1983年10月11日 第三種郵便物認可
通巻第457号 (毎月1回1日発行) 2021年6月1日発行

2021/6月号

公益財団法人 常陽藝文センター

日本地図

藩内抗争

明治維新

尊王精神

副将軍説

特集

徳川御三家水戸藩

薬効本

十二の

謎

に迫る

官位

八幡信仰

助さん 格さん

藩祖の血統

大日本史

水戸黄門



■御三家だからできた 新知識の吸収と普及

水戸藩歴代藩主の中では二代の光圀と九代の斉昭が傑出し、名君として慕われている。光圀は義公、斉昭は烈公とそれぞれ諡され、水戸市の偕楽園東隣に両公を祭神とする常磐神社が建つ。同神社は明治初年、偕楽園内に祠堂が造られたのが始まりで、その後、朝廷から常磐神社の社号を受け、明治七年（一八七四）、現在地に社殿が造営された。



光圀公と斉昭公を祀る常磐神社（水戸市常磐町）

前述の通り、二人は医薬や医療の面でも士民のために尽力している。間違いなく、二人の資質がそうさせたといえるが、徳川御三家であったからこそできた、という一面があることも見逃せない。当時の最新の知識を広く海外からも得ているし、またそうして得たものの普及にも努めたが、それは他の外様大名などであつたなら幕府からならまれ、危険視される行為でもあつた。

『水戸市史』中巻三によれば、斉昭は、そのようにして身に着けた医薬の知識を藩外の者にまで施している。北地探検で知られる間宮林蔵が湿瘡（皮膚病の一種）に悩んでいると聞くと、それに効く薬の処方を側近の藤田東湖に持たせ、見舞わせたという。また、弘道館の医学館でさまざまな良薬を製造させており、その中には牛乳を固めた、今日のバターに似ているが当時は良薬として用いられたものもある。

■吉田松陰も利用した

長久保赤水の日本地図

江戸時代中期の水戸藩領から

は、実用性の高い日本地図を初めて作り、世に出した長久保赤水が出てくる。日本地図では、初めて実測に基づくものを完成させた伊能忠敬が名高い。けれども、この伊能図が全図完成したのは江戸時代後期の文政四年（一八二二）のこと。一方、赤水が「改正日本輿地路程全図」（「輿地」は大地の意）を完成させたのは、伊能図の四十二年も前、安永八年（一七七九）であつた。

赤水は、現在の高萩市赤浜の農家に生まれ、農業の傍ら勉学に励み、地理学をはじめ漢学・儒学、さらに農政学や天文学にも通じ、多岐にわたって学才を発揮した。日本地図の作製には、長崎に旅した時の見聞を役立てたほか、地図に関する文献や絵図の収集・研究に努め、六十三歳の時に完成させ、翌年これを大阪（当時は大坂）で出版。その後も重版・改版され、赤水が八十五歳で没した後も長く、幾度も版を重ね、明治時代の初めまで一世に近くもの問、旅行者や航海者を中心に人々に広く愛用されるものとなった。

赤水の地図は、情報・文献の徹底的な収集と分析から生まれ

ている。正確度においては、実測に基づく伊能図よりは劣るものの、実用には十分堪えるだけの正確性のある、本格的な日本地図である。正確な地図に対し、支配者は独占・機密扱いしがちで、事実、伊能図は長く国家機密扱いされ、一般には供されなかった。しかし、赤水図は広く世に出回り、人人に利用されている。その背景には御三家水戸藩の存在があり、その後ろ盾により出版が可能になった、との指摘もなされている。

長州藩士・吉田松陰が大坂から長州の実兄に宛てた手紙の中に、「赤水図は、これがなくては不自由なので、当地にて買い求めた」旨のくだりがあり、松陰も赤水の日本地図の利用者だったことがわかる。赤水は五十二歳のとき水戸藩郷士格に取り立てられ、さらに六十一歳で水戸藩六代藩主はるもり治保に学問を講義する侍講となった。



「改正日本輿地路程全図」(寛政3年、高萩市歴史民俗資料館蔵、長久保甫氏寄贈)